

『日本アジア研究』第15号（2018年3月）

## 細長いものに用いる類別詞「本」と“条”の考察 —日本語と中国語によるものの捉え方の相違を探る—

戴 紅\*

日本語と中国語において細長いものを数える時に用いられる類別詞「本」と“条”を対象にそれぞれのカテゴリーの中で、中心的成員から周辺の成員までどのように拡張されているかを考察した。「本」と“条”の中心的成員、拡張のプロセスについて分析を行った結果、中心的成員の特徴が違うことがわかった。「本」の特徴は細長く、限られた長さをもつが、“条”の特徴は長さが目立ち、幅も柔軟性もある。また、「本」と“条”の中心的成員から周辺の成員までの拡張プロセスは類似しているものの、「本」は形が見えない事柄にまで拡張され、“条”は細長い形のイメージが消えないこともわかった。「本」と“条”は同じ細長いものに用いる類別詞ではあるが、カテゴリーの成員の構成が違い、実際の用法にも様々な相違点が見受けられることを明らかにした。

キーワード：数量類別詞、中心的成員、ものの捉え方

### 1. はじめに

日本語の「本」と中国語の“条”にはものの計数を担う役割のほかに、ものをカテゴリー別に分ける類別詞としての機能がある。ものは類別詞によってそれぞれのカテゴリーの成員であることが表示される。「本」も“条”も細長いものに用いられる類別詞である。具体的には「本」は鉛筆、カセットテープ、細長い容器に入った流動物、小さく見える灯台、ホームラン、映画、仕事、電話などに用いられ、“条”はネクタイ、管、長い椅子、布団、コマーシャル、魚などに用いられる。「本」も“条”も鉛筆（「本」）やネクタイ（“条”）のような具体物から仕事（「本」）やコマーシャル（“条”）のような抽象的なものまで、広範に用いられている。しかし、同じ細長いものに用いる類別詞「本」と“条”であるが、カテゴリーの成員の構成が違う。なぜそのような現象が存在するのかという問題を解明するために、本稿は「本」と“条”で数える典型的な具体物を中心的成員にして、その他の成員について共通の特徴を基準にグループ分けする。また、「本」と“条”のカテゴリーの成員を考察し、カテゴリー化におけるプロトタイプ理論に基づき、「本」と“条”の用法を分析する。それによって日中両言語の違いを見つけ、日本語と中国語におけるものの捉え方を対照する。

\* だい・ほん，埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程

## 2. 日本語の「本」の分析

### 2-1 先行研究

「本」の用法について、松本(1991)、河上(1996)、深田(2000)、小出(2003)などの先行研究を概観する。

なお、先行研究によっては「類別詞」ではなく、「分類詞」や「分類辞」という用語を用いている場合がある。以下で引用する際には、その研究の用語に従う。

#### 2-1-1 松本(1991)

松本(1991)は原型意味論の枠組みを採用している。原型意味論においては、語の意味の定義には二種類の条件が区別される。一つは、語の適格な使用のために必ず満たされなければならない必要条件である。もう一つは、それが満たされればその使用が典型的用例となされるという典型条件である。典型条件には更に典型の規定への貢献の仕方の違いに応じて、程度条件と特徴条件を認めることができる。松本(1991)では「本」の用法を次のように示されている。

- ・ <一元的>的なものに使われる。  
鉛筆, ペン, 棒, タバコ, ひも, 糸, 髪の毛, 木, 柱, 腕, 脚, 指など。
- ・ 細長さがあまり顕著ではないが、細長さの度合いが典型の規定に参与している。ズボン, ギターなど。
- ・ <輪を成していない><巻かれていない>という特徴条件がある。  
輪ゴムについて、完全に容認可能とする話者から完全に容認不可能とする話者まで、様々な話者が存在する。
- ・ <あまり大きくない>という典型条件がある。  
灯台, 橋なども「本」の容認度が低い。ただし、これらのものが遠くに小さく細く見える時は容認度が高い。
- ・ 比喩的に一次的と見なされる事物にも適用が可能である。  
細長い容器に入った流動物(瓶や缶に入ったコーラ, 牛乳, 酒, チューブ入りの糊, スティックタイプの砂糖など), 長い軌跡, 経路が想定されるもの(ホームラン, 安打などの野球の打球, サッカーなどのパス, シュート), 一続きのものとして経験されるもの(連載小説, 論文, 台本, テレビ番組)がある。

#### 2-1-2 河上(1996)

河上(1996)は「本」を用いた例を概観することで、「本」という分類詞は放射状カテゴリーを成していると主張している。「本」を用いた用例の用法について次のように解釈されている。

- ・ サイダー  
「サイダー」は液体なので本来形はないが、おそらく容器(瓶)の形状から細長いイメージを得ていると思われる。
- ・ 電話  
「電話」はコミュニケーションの内容は筒のようなものを通して相

手に伝えられるという比喩的なイメージが重ね合わされていると考え  
ると、空間的ドメインからコミュニケーションという社会的ドメイン  
への導管メタファーに基づくメタファー的写像の例と考えられる。

- ヒット, サービスエース, シュート  
「ヒット」は一つにはヒットを打つ道具としてのバットの形状は細  
くて長いので、これがメトニミー的に関与しているという可能性があ  
る。もう一つの見方として、ボールが描く軌跡が細く長いことから、「本」  
が使われている可能性が考えられる。
- 映画, 連載, 論文  
ボールなどの軌跡の例では、動くのは対象であるボールであり、観察  
者は動かなかった。一方「論文」の例では、軌道を単に見るのではなく、  
論文を序論、本論、結論と読みすすむことで実際にその筋立て(=軌道)  
を経験するという主体的なイメージが得られ、読む側、書く側が心的、  
主体的にその「軌道」を辿っていくという変換である。

### 2-1-3 深田 (2000)

深田 (2000) は北原保雄編 (1990) の『日本語逆引き辞典』に収録されてい  
る約7万1千語の中から、自らが「本」を用いて数えることができると感じた  
単語452語を抽出し、上位概念のものと重複するもの、グループ化できるもの  
を整理した138語・27グループ計165項目を分析の対象としたものである。  
項目全てに共通する性格として、「起点、もしくは終点が認識できること」を  
指摘し、また「流れ」という点も重要な位置を占めると指摘している。当た  
った宝くじに関しては、賞金の流れが生じるのに対し、はずれたものにはその流  
れは生じない。したがって、宝くじは当たりのみが「本」で数えられる性格を  
持つことになると述べている。

### 2-1-4 小出 (2003)

小出 (2003) は「本」の用法を6つの類に分ける。

- A: 細長い具体物。  
えんぴつ, たばこ, 釘, 指, ギター, ズボン, 橋などの例がある。  
「一元的な伸びがある」, 「独立した単体をなす」, 「あまり大きくない」  
という3つの特徴は中心的な位置を占める。
- B: 軌跡を描いて移動するものを含み、人の活動に含まれるもの。  
ホームラン, シュート, サービスエース, スキージャンプなどの例  
がある。この類の用例は、「本」は対象(「ヒット」)がそれを含む全  
体事象(「野球」)の中で一定の価値あるものの場合に使われるのだと  
思われる。
- C: 人の創造的な活動から生まれた一続きのもの。  
論文, 連載小説, 映画, 法案などの例がある。「連載」とは内容的  
には明確でなくてもよく、文章が継続的に掲載されていくという時間  
軸に沿った出来事である。
- D: 限られた期間で完結する職業的活動。  
仕事, 自主事業, ライブステージなどの例がある。D類の「本」が

対象を独立単体の「ひとまとまりのもの」として捉える捉え方であることと軌を一にするものである。

E：競争的、競合的な活動に含まれるもの。

当たりくじという例がある。特徴はB類の「ある活動に含まれ、かつその活動にとって価値があり、かつあまり大きくないモノ」という構造が利用されていると思われる。

F：商業活動、武道など活動性の高い事象に含まれるもの。

束ねられた古本、露店などの例がある。ある活動の中で、その活動に固有に現れるものであって、その活動を離れば、別の数え方をされるものである。

## 2-2 「本」の分類

先行研究が挙げている用例と先行研究の分析を踏まえながら、本稿の考察も加え、「本」の用法を以下の表1に示す8つのグループに分ける。本稿はプロトタイプ理論に基づき用法の分類を行う。プロトタイプ理論では、事物をカテゴリー化する場合、そのプロトタイプを核とし、その周りに様々な成員を位置づけることで、全体を構造化しているとみなす。カテゴリーの成員はその成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺的なものもある。

表1：日本語の「本」の分類

分類 \ 条件	①細長い	②限られた長さをもつ	③具体物
【本1】鉛筆、ペン、棒、タバコ、ひも、髪の毛、木、柱 etc.	○	○	○
【本2】カセットテープ、ビデオテープ.	△	○	○
【本3】細長い容器に入った流動物（瓶や缶に入った牛乳など）.	△	/	○
【本4】ズボン、ギター、（小さく見える）灯台、橋.	△	△	○
【本5】野球のヒット、ホームラン、サッカーなどのパス etc.	△	△	×
【本6】連載小説、論文、台本、テレビ番組、映画.	△	○	△
【本7】仕事、ライブステージ.	△	△	/
【本8】電話、手紙.	△	/	/

【本1】は中心的成員である。中心的成員の条件について、先行研究の分析を参考にし、①細長い、②限られた長さをもつ、③具体物という三つの項目にする。

【本<sub>2</sub>】から【本<sub>8</sub>】は、【本<sub>1</sub>】の中心的成員から拡張された用法を持つメンバーである。中心的成員の条件は「細長い」「限られた長さをもつ」「具体物」の三つであるが、それらの条件が「本」の拡張プロセスの中で、どのように関わっているかを各グループの分類の基準とする。中心的成員の条件に当てはまる場合○、当てはまらない場合×、ものによって状況が違う場合△、中心的成員の条件に関わらない場合／で示した。

以下で【本<sub>1</sub>】から【本<sub>8</sub>】のそれぞれの特徴について詳しくみていく。引用する用例は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)によるものである。

### 2-2-1 【本<sub>1</sub>】

条件：①細長い (○) ②限られた長さをもつ (○) ③具体物 (○)

特徴：限られた長さをもつ細長い具体物。

用例：鉛筆、ペン、棒、タバコ、ひも、糸、髪の毛、木、柱、腕、脚、指。

「本」の中心的成員の特徴に関わる先行研究の記述を以下にまとめる。

松本 (1991)：一次元的な伸びぐあいが目立つ、あまり大きくない無生物。

河上 (1996)：限られた長さをもつ細いもの。

小出 (2003)：あまり大きくない、一元的な伸びがある独立した単体。

深田 (2000)：起点もしくは終点が認識できることは項目全てに共通する性格である。

河上 (1996) の「限られた長さをもつ」は、松本 (1991) の「あまり大きくない」と深田 (2000) の「起点もしくは終点が認識できること」などの特徴を表していると思われるため、本稿は「限られた長さをもつ」を採用する。また、「本」の用法が抽象的なものにも及ぶことを考えて「具体物」という項目を設けることにする。したがって、①細長い、②限られた長さをもつ、③具体物の三つを「本」の中心的成員の条件とする。

### 2-2-2 【本<sub>2</sub>】

条件：①細長い (△) ②限られた長さをもつ (○) ③具体物 (○)

特徴：具体物である。伸ばせば長い。

用例：カセットテープ、ビデオテープ。

このグループの用例は、深田 (2000) の「片方の先端が固定され、他方へ伸びるもの」という特徴に適合するため、「伸ばせば長い」は条件付きで「細長い」という条件を満たすと思われる。

### 2-2-3 【本<sub>3</sub>】

条件：①細長い (△) ②限られた長さをもつ (／) ③具体物 (○)

特徴：もの自身は形がなく、入った容器を通して比喩的に細長いものに見なされている。

用例：細長い容器に入った流動物 (瓶や缶に入ったコーラ、牛乳、酒、チューブ入りの糊、スティックタイプの砂糖など)。

このグループに関して、松本 (1991) は「これは容器の形からの換喩であ

る」と説明し、河上(1996)は「液体なので本来形はないが、おそらく容器(瓶)の形状から細長いイメージを得ていると思われる。形の近接性の連想に基づくため、メトニミーが関わっていることになる」と説明している。

このグループに入っているもの自身が液体だったり糊状だったりして、形はないが、細長い容器のイメージを用いて「本」を使用すると考えられるため、「細長い」という条件を満たすと思われる。

#### 2-2-4【本4】

条件：①細長い(△) ②限られた長さをもつ(△) ③具体物(○)  
特徴：具体物である。細く小さく見える場合、「本」の使用が容認される。  
用例：ズボン、ギター、(細く小さく見える)灯台、橋。

このグループに関して、松本(1991)では「ズボン、ギターに対する-ホンの使用は、容認度に個人差があり、また容認される場合も特殊な用法といった響きがある場合が多い。従って、これらの物体は-ホンの非典型的な指示物であると言える。灯台、橋なども-ホンの容認度が低い。ただし、これらのものが遠くに小さく細く見える時は容認度が高い」と解釈されている。橋について、深田(2000)では2地点を結ぶものとして2地点を結び移動可能にするものだと指摘されている。

このグループの用例は細いとは言えないズボン、ギターと、小さいとは言えない灯台、橋が入っているが、共通している点は細く小さく見える場合、「本」の使用が容認されることである。細長くはないが、場合によって細く長く見える時、または小さいものではないが、遠くに小さく見えた場合、「本」の「細長い」と「限られた長さをもつ」という条件を満たすことになる。

#### 2-2-5【本5】

条件：①細長い(△) ②限られた長さをもつ(△) ③具体物(×)  
特徴：具体物ではない。終点が確認でき、視覚的に長さを感じる。  
用例：野球のヒット、ホームラン、安打、サッカーなどのパス、シュート。

「ヒット」について、河上(1996)では、ヒットを打つ道具としてのバットの形状が細くて長いこととボールが描く軌跡が細く長いことから、「本」が使われている可能性が考えられると分析されている。また「人工衛星を1本打ち上げる」「大陸間弾道ミサイルを1本うち込む」はかなり容認度が低くなるが、これは人工衛星やミサイルの描く軌道が延々と長い(長すぎる)ものであり、その長さの区切りを覚覚することがイメージ的にも難しいためではないかと指摘されている。

バットは野球の道具で、サッカーなどで使わないため、このグループが共通しているのはボールが描く軌跡が視覚的に細長く感じる点だと思われる。またボールの描く軌跡は描く軌道の長い人工衛星に比較すれば「終点が確認できる(限られた長さをもつ)」と言えるのもこのグループの特徴である。

「ホームラン」と「シュート」は次のような例がある。

- (1) 四十九年には、それまでの日本記録より二十一本も多い四十六本の

- ホームランを打った。 (『読売新聞』朝刊 2005)
- (2) 日本は十本を超えるシュートを浴びせられながら、公判四十分を過ぎるまで0対0と、もちこたえた。 (『週刊現代』2004)

#### 2-2-6 【本 6】

条件：①細長い (△) ②限られた長さをもつ (○) ③具体物 (△) 特徴：形はないが具体物である。時間軸に長さを感じる。 用例：連載小説，論文，台本，映画，テレビ番組。
--

「論文」の例について、河上 (1996) では「軌道を単に見るのではなく、論文を序論、本論、結論と読みすすむことで実際にその筋立て (= 軌道) を経験するという主体的なイメージが得られ、読む側、書く側が心的、主体的にその「軌道」を辿っていくという変換である。また、典型例に見られた「限られた長さをもつ」という性質は映画鑑賞、論文執筆等の経験というものもいつまでも続くわけではなく、いつかは終わるという時間的な長さに反映されていると考えられ、ここでも写像される以前の「本」の性質が保持されている」と分析されている。「連載」の例について、小出 (2003) では「連載とは定期的に雑誌などに文章を載せることである。内容的には明確でなくてもよく、文章が継続的に掲載されていくという時間軸に沿った出来事が「連載」である。このような内容の性格に触れないで、外形的に捉える捉え方を「本」は可能にする」と分析されている。

このグループの用例は形がないため、大きさが関与しないが、永遠に続くものではないため、「限られた長さをもつ」がこのグループの特徴であると思われる。読んだり観賞したりするのにかけた時間のことを考えれば、時間軸に長さを感じるのもこのグループの共通点であると思われる。

また、このグループの映画や番組などは、小出 (2003) が指摘されたように人の創造的な活動の結果生み出されたものである。小説、論文、映画は場合によってそれぞれ「部」「つ」「作」を用いることもできるが、「本」の使用が可能になるのは主に観賞したり制作したりすることに注目する場合ではないかと思われる。次のような例がある。

- (3) 今日はここへ来る前に映画を一本見てきました。  
(周防正行他「週刊朝日」)
- (4) 戦時体制の下で、東京へ帰っても下っ端だから、私にも仕事ないし、映画も年に五、六本しかつくっていない。どうせそんな状態なら決心したわけです。  
(新藤兼人『老人とつきあう』)
- (5) ラジオ「土日ワイド永六輔その新世界」「誰かとどこかで」と二十年、三十年と続く番組を二本抱え、あとはひたすら取材、仕事、ボランティアで全国に出かけていく。  
(佐田智子『季節の思想人』)

例を通して「映画」や「番組」に「本」を用いる場合、「映画」「番組」そのものより、「映画を見たり、制作したりすること」や「番組を抱え、出演すること」に注目して「本」を用いたのではないかとも考えられる。

## 2-2-7 【本ア】

条件：①細長い（△） ②限られた長さをもつ（△） ③具体物（／）  
特徴：限られた期間で完結することで、時間的に長さを感じる「こと」である。  
用例：仕事、ライブステージ。

このグループの用例について、小出（2003）では希薄ながら存在する時間性ととともに、対象全体を外側から「独立単体」として捉えた時の「有限な」「ひとまとまり」であるというイメージが「本」の使用を可能にしているのだと思われると分析されている。

「仕事」に関して次のような例がある。

- (6) カメラマンの仕事の依頼は月に一本か二本あるかどうかで、しかも、それをやっても、新しい仕事が広がるという可能性は、まるでない。 （大沢在昌『夢の島』）
- (7) 最近引き気味だった公民館系の講演の仕事を一本引き受けた。 （伏見憲明『ゲイという「経験」』）

カメラマンの仕事も講演の仕事も限られた期間で完結するもので、時間的に限りのある長さを感じるのが特徴である。また、ここでいう仕事は撮影や講演を指していて、一つの文化活動とも言えるため、音楽のライブステージに共通している点があると思われる。したがって、「仕事」を「本」で数える場合、「仕事」の内容が限定され、【本<sub>6</sub>】の連載小説、論文、台本、テレビ番組、映画のような創造的な活動に関連する「仕事」の場合に、「本」の使用が容認されるのではないかとと思われる。

## 2-2-8 【本カ】

条件：①細長い（△） ②限られた長さをもつ（／） ③具体物（／）  
特徴：抽象的に長さを感じる「こと」である。  
用例：電話、手紙。

「電話」に関して、河上（1996）ではコミュニケーションの内容は筒のようなものを通して相手に伝えられるという比喩的なイメージが重ね合わされていると考えると、空間的ドメインからコミュニケーションという社会的ドメインへの導管メタファーに基づくメタファー的写像の例と考えられると分析されている。「電話」と「手紙」は次のような例がある。

- (8) 私が電話一本かけず、葉書一枚寄越さなかった。 （井口泰子『花悪夢』）
- (9) 台帳からコピーを欲しいと思えば、手紙一本書けばちゃんと送ってきます。 （阿部謹也『世間を読み、人間を読む』）

このグループは、河上（1996）のように解釈できると思われる。すなわち、コミュニケーションの内容は筒のようなものを通して相手に伝えられるという比喩的なイメージが重ね合わされている。また、例（8）（9）の用法を通し



て、「本」を用いる場合、電話と手紙そのものを数えるより、電話と手紙という手段を用いて相手に連絡するという行為に注目しているのではないかとも考えられる。このことから「本」は具体物から出来事まで拡張されていると思われる。したがって、このグループは「具体物」と「限られた長さ」といった条件が関わらず、相手に連絡することと、連絡の要件やメッセージが相手に届くように抽象的な長さを感じるという共通点を持つと考えられる。

### 2-2-9 その他

先行研究では当たりくじ、束ねられた古本、露店などについて、「本」の使用を認める用例もある。当たりくじに関して、深田（2000）では2者間に利益等の移動があるものだと指摘されているが、小出（2003）では、「当たりくじ」を「本」で数える時に、何かしら一次元的なもののイメージを探そうとするという心理的傾きに表れていると分析されている。

当たった宝くじの番号が発表され、はずれた宝くじの番号が発表されないように実際の言語活動の中で、当たりくじを取り上げることが多いため、「本」との結びつきが強くなるのではないかと思われる。また、「くじ」というと、「同じ形の紙片・木片などに語句や符号を記し、その一つを抜き取ることで勝敗・当落・吉凶などを決めるもの（『明鏡国語辞典』）」の形を思い浮かべることもあるのではないかと思われる。このようなことから、使用に制限がある「当たりくじ」と臨時的に「本」の使用を認める「束ねられた古本」、「露店」などの用例は本稿の分類に入れず、保留したい。

### 2-3 日本語の「本」の拡張プロセス

以上の分類を踏まえ、この2-3では、「本」の拡張プロセスについて考察する。「本」は、次の図1が示すように、中心的成員【本1】（鉛筆、ひも、髪の毛 etc.）から「もの」（具体物）、「こと」（抽象的なもの）へ拡張されていると思われる。

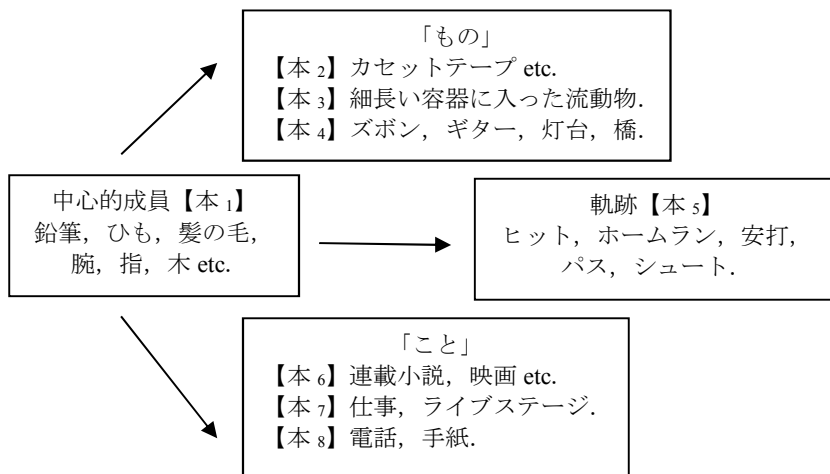


図1:「本」の拡張プロセス

「もの」のグループは具体的なものであり、【本<sub>2</sub>】(カセットテープ、ビデオテープ)、【本<sub>3</sub>】(細長い容器に入った流動物)、【本<sub>4</sub>】(ズボン、ギター、灯台、橋)が該当する。【本<sub>2</sub>】は「あまり大きくないが、伸ばせば長いもの」、【本<sub>3</sub>】は「比喩的に細長く見えるもの」、【本<sub>4</sub>】は「細長さが顕著ではないが、細く小さく見えるもの」のような特徴を持つ。

「もの」グループの特徴について、中心的成員【本<sub>1</sub>】の「限られた長さをもつ細長い具体物」という特徴に比較すれば、形状と大きさの上では違いが見受けられるが、具体的なものであり、中心的成員に類似する点が多いため、中心的成員に近い拡張だと思われる。ここでは「近距離拡張」と称す。

【本<sub>5</sub>】(ホームラン、安打、シュート)は、野球のヒット、ホームランとサッカーなどのパス、シュートなどを含む。特徴は「視覚的に長さを感じ、終点を確認できる」である。【本<sub>5</sub>】に関してホームランやシュートなどは、具体的なものではないが、ボールの描く軌跡というものが「映画」や「仕事」などより細長いイメージをしやすいと思われる。このような特徴から【本<sub>5</sub>】は「本」の中心的成員(具体物)と周辺の成員(抽象的なもの)の中間地点に位置する存在であろう。

「こと」グループは抽象的なものがメンバーであり、中心的成員の「細長い」という特徴を時間的に抽象的に感じるが、具体的なものではないため、「本」の周辺の成員になると思われる。ここでは「遠距離拡張」と称す。

「こと」グループの中に【本<sub>6</sub>】(連載小説、テレビ番組、映画 etc.)、【本<sub>7</sub>】(仕事、ライブステージ)、【本<sub>8</sub>】(電話、手紙)が入っている。【本<sub>6</sub>】のメンバーである連載小説などは場合によって具体物とも言えるが、形を持っていない。「時間軸に長さを感じるが、限られた長さをもつ」という特徴を持つと思われる。【本<sub>7</sub>】の仕事などは「限られた期間で完結し、時間的に長さを感じる」となる。【本<sub>8</sub>】は電話や手紙などの連絡手段を取る行為に注目し、相手に届くというような抽象的な長さを感じる。

「こと」グループの特徴について、【本<sub>6</sub>】の連載小説、論文、映画などは、小出(2003)が指摘されたように人の創造的な活動の結果生み出されたものである。小説、論文、映画はそれぞれ「部」「つ」「作」を用いることもできるが、「本」の使用が可能になるのは主に制作や観賞という活動に注目して挙げる場合ではないかと思われる。【本<sub>7</sub>】の仕事とライブステージは単なる時間的に長さの制限がある仕事ではなく、文化的で創造的な活動というイメージの「仕事」であると思われる。【本<sub>8</sub>】の電話や手紙は連絡手段を取る行為に注目し、「本」を用いる用法ではないかと思われる。したがって「こと」グループに関して、「本」で数える対象を表す語の意味が文脈などによって限定されることがあると考えられる。

### 3. 中国語の“条”の分析

中国語において事物や動作の数量を数える時、単位を表す語を「量詞」という。本稿では、中国語に関する記述の場合は「量詞」という語を使う。本稿でいう「量詞」は個別化されたものの数を示す意の「数量類別詞」を指す。

量詞は個体量詞、集合量詞、度量量詞、動量詞、時間量詞など種類が多い。

その中で、個体量詞はものを類別する機能が顕著だと思われる。個体量詞とは人や事物の一つ一つ数えられる量を表すものである。“条”などの形状を表す量詞は個体量詞の中に分類されている。

中国語では、細長いものを数える時に使用する量詞は複数あるため、細長いものに用いる量詞の用法を整理してから“条”の分析を行う。

### 3-1 細長いものに用いる量詞

『中日辞典（第2版）』（小学館）を使い、共起する量詞が表示されている名詞の用例を整理した。その結果、細長いものを数える時に用いられる量詞は“条 tiáo, 根 gēn, 支 zhī, 枝 zhī, 管 guǎn, 道 dào”の6つがあることがわかった。数える対象の形状に注目して使われている量詞は“条, 根, 道”で、形状のほかに機能にも注目するのは“支, 枝, 管”である。“条, 根, 道, 支, 枝, 管”の6つの量詞の用法を次のように整理する（なお、ほかに棒状のものが付いている器具を数える“杆 gǎn”, より合わせたひもなどの1本1本をさす“股 gǔ”, 野菜や植物などを数える時に使う“棵 kē”, 細長い形をしているが、柄や取っ手の付いている器具を数える“把 bǎ”などの量詞もあるが、これらは使用する対象が固定されていると思われるため、除くこととする）。

- 1) 条 (tiáo) : 柔軟性があり、幅のある細長いものに用いる。  
 绷带 (包帯), 围巾 (マフラー), 领带 (ネクタイ).
- 2) 根 (gēn) : 根がある細いもの、または硬くて細いものに用いる。  
 头发 (髪の毛), 牙签 (爪楊枝), 火柴 (マッチ).
- 3) 道 (dào) : 非独立体の細長いものに用いる。  
 河 (川), 彩虹 (虹), 缝子 (隙間), 伤痕 (傷痕).
- 4) 支 (zhī) : 棒状の器具に用いる。  
 圆珠笔 (ボールペン), 接力棒 (バトン), 笛子 (笛).
- 5) 枝 (zhī) : 枝がついている花を数えるのに用いる量詞であるが、棒状の道具を数える時にも使われている。棒状の道具に用いる場合、支 (zhī) と置きかえることができる。
- 6) 管 (guǎn) : 細長い円筒形のものに用いる。  
 长笛 (フルート), 口红 (口紅), 毛笔 (筆).

形状または形状と機能に注目して細長いものに用いる6つの量詞は、数える対象が細長い形をしているという共通点を持っているが、量詞を選択する場合、長さのほかに幅があるかどうか、太さ、硬さ、機能などの要素も関わっている。

“条”は細長いものに用いる複数の量詞の中の一つではあるが、具体物だけではなく、抽象的なものと動物にも用いられるため、最も用法の多い形状量詞だと言われている。

### 3-2 先行研究

形状量詞に関する先行研究には、張 (2007), 唐 (2007), 孟 (2009) などがある。

張 (2007) は原型意味論とイメージ変換の分析理論に基づき、細長いものに用いる“道”と“条”が具体的なものと抽象的なものを計量する際の相違点に注

目する研究である。唐（2007）は“条”“根”の意味，メタファー，名詞との共起関係という三つの面で比較する研究である。孟（2009）はもともと名詞である“条”が東漢時代初期に量詞として使われるようになり，その後，“条”の用法がどのように広がったかに関する研究である。

類似の意味を持つ量詞の意味比較と，一つの量詞についての通時的な意味の広がりをテーマにする先行研究が多いと思われる。本稿は日本語の類別詞の「本」と対照する目的で，実際使われている用例を対象に“条”の用法を分類し，分析を行う。

### 3-3 “条”の分類

「国家語委現代漢語平衡語料庫」<sup>1</sup>というコーパスを利用して，量詞“条”と共起している名詞を集める。重複する語とグループ化できる語が多数あったため，上位語を中心に整理し，198項目の例を収集できた。“条”が用いられる198語の用法を考察し，その中から一般的によく使うと思われる使用例を本稿の分析対象とする。

“条”の分類は「本」と同様にプロトタイプ理論に基づいて行う。“条”の中心的成員の決め方について，本稿は主に“条”のみで数える具体物を“条”の中心的成員にする。中国語では同じものに複数の量詞を用いられることがあるため，一つのものに対して一つの量詞しか用いられない場合，そのものが最も使用される量詞の意味・特徴を反映し，代表的な典型例になるのではないかと考えるからである。

“条”の中心的成員のメンバーは横断幕，ズボン，ネクタイ，タオル，バスタオル，マフラー，ベルトなどがある。このグループを【条<sub>1</sub>】にし，条件は「長さが目立つ」「幅がある」「柔軟性がある」「具体物」の四つである。これらの条件が中心的成員から周辺の成員へ拡張するプロセスの中で，どのように影響しているかを基準にし，“条”の用法を9種類に分けた。【条<sub>1</sub>】は中心的成員であり，【条<sub>2</sub>】から【条<sub>8</sub>】は【条<sub>1</sub>】から拡張された用法として，中心的成員の条件に当てはまる場合○，当てはまらない場合×，ものによって状況が違う場合△，中心的成員の条件が関わらない場合／で示す。

【条<sub>9</sub>】は独立したもので，“条”で数える動物のグループである。

“条”の分類を表2に示す。

表2：中国語の“条”の分類

分類 \ 条件	①長さが目立つ	②幅がある	③柔軟性がある	⑤具体物
【条 <sub>1</sub> 】横断幕，ズボン，ネクタイ etc.	○	○	○	○
【条 <sub>2</sub> 】尻尾，舌，むち，管，鎖 etc.	○	△	△	○
【条 <sub>3</sub> 】長い椅子，机.	△	△	×	○

<sup>1</sup> 「国家語委現代漢語平衡語料庫」は中国教育部語言応用研究所により作成された「現代中国語均衡コーパス」である。内容は人文，社会，科学，文学などの分野に及ぶ。

【条4】ハンカチ, 布団, シーツ etc.	△	○	○	○
【条5】川, 道, 滝, トンネル etc.	○	○	△	○
【条6】光線, 虹.	○	△	×	○
【条7】半径, 辺, 弧, 線分, 座標 etc.	○	×	/	△
【条8】コマースヤル, ニュース etc.	△	/	/	×
【条9】蛇, ミミズ, 魚, 毛虫, 犬, 牛 etc.	○	△	/	○ (動物)

### 3-4 “条”の特徴

“条”の用例をどのような基準で、グループ分けしたかも含めて、この節で“条”の特徴を分析し述べていく。引用する用例は「国家語委現代漢語平衡語料庫(現代中国語均衡コーパス)」によるもので、筆者が日本語訳をつけた。

#### 3-4-1 【条1】

条件：①長さが目立つ (○) ②幅がある (○) ③柔軟性がある (○)  
④具体物 (○)

特徴：長さが目立ち、幅も柔軟性もある具体物である。

用例：横幅 (横断幕), 裤子 (ズボン), 领带 (ネクタイ), 毛巾 (タオル), 浴巾 (バスタオル), 围巾 (マフラー), 腰帶 (ベルト)。

中国語では、細長い形に注目する量詞は“条, 根, 支, 枝, 管, 道”の6つがあると思われる。“根”は根のあるもの、硬くて細いもの, “支”“枝”は棒状の道具, “管”は筒状のもの, “道”は非独立体の細長いものに用いられるようにそれぞれの基本義を持つ。その中の“条”は共通の「長さが目立つ」という点のほかに、形状の上では「幅がある」、素材の面から見れば「柔軟性がある」という特徴を持つ。また、抽象的なものにも用いられるため、「具体物」も“条”の中心的成員の条件になると思われる。このような考えで、本稿では、①長さが目立つ, ②幅がある, ③柔軟性がある, ④具体物との四つの項目を“条”の中心的成員の条件にする。

#### 3-4-2 【条2】

条件：①長さが目立つ (○) ②幅がある (△) ③柔軟性がある (△)  
④具体物 (○)

特徴：具体物である。長さが目立つが、幅が目立たない。柔軟性のあるものもあれば、ないものもある。

用例：尾巴 (尻尾), 舌头 (舌), 鞭 (むち), 管子 (管), 鏈子 (鎖), 飄帶 (リボン), 繩子 (縄), 项链 (ネックレス)。

この中に細長いものの硬さに注目する量詞“根”の使用が可能になるものもある。例えば“舌头 (舌)”という語に“条”と“根”を両方用いる例がある。

- (10) 啄木鸟向着大家，伸出一条舌头，舌头是那么长，长得像一根鞭子。  
 (キツツキが皆に向かって舌を出した。その舌は長くて鞭のようだ。)  
 (冯振文《啄木鸟的故事》)
- (11) 小蜜蜂用一根细长的舌头，插到花心里，吸起又香又甜的蜜汁来。  
 (ミツバチが細長い舌を花の蕊に挿し、香が良くて甘い蜜を吸い始めた。)  
 (金光《蜜蜂来到花儿家》)

(11) では、「舌」の量詞は“根”を用い、「插（挿す）」という動詞と共に舌の硬さに注目していると思われる。それに対して(10)の「舌」は“条”と共起し、長く伸びている形を重要視していると考えられる。

### 3-4-3 【条 3】

条件：①長さが目立つ(△) ②幅がある(△) ③柔軟性がある(×)  
 ④具体物(○)  
 特徴：具体物である。機能する部分が長く、幅もある。柔軟性はない。  
 用例：凳子(背もたれのない腰かけ)、躺椅(寝椅子)、桌子(机)。

このグループのものは機能している部分が細長い形をしている。「腰かけ」「机」には四角い形のものもあるが、この類の名詞の前に“长(長い)”という形容詞で修飾することによって長いというイメージをはっきりとさせ、“条”との共起が可能になると考えられる。次のような例がある。

- (12) 达·芬奇在一条长桌的正面画了 13 个人物，他们的表情是各不相同的。  
 (ダ・ビンチが長い机に 13 人の人物を描いた。表情がそれぞれ違う。)  
 (邵传烈《走向人间的维纳斯》)

### 3-4-4 【条 4】

条件：①長さが目立つ(△) ②幅がある(○) ③柔軟性がある(○)  
 ④具体物(○)  
 特徴：具体物である。素材の関係で柔軟性がある。四角い形に近いものが多く、長さが目立たない。  
 用例：手绢(ハンカチ)、包袱(風呂敷)、被子(布団)、床单(シート)、毛毯(毛布)。

このグループは大きさに関わらず四角い形に近いものが多い。共通の特徴としては細長い形にたたんで使用する点である。

ものの形状を類別する量詞について、物体の次元間の比例が形状量詞における認知基礎であると主張する研究がある。それは石毓智(2001)である。石(2001)では、長さとの比例が「0」に近ければ“条”を用い、「1」に近ければ“张”を用いると主張している。“张 zhāng”は「平面を持つものを数える」量詞である。これに対して宗(2012)は、“被子(布団)”と“床(ベッド)”の次元比例はほぼ同じであるにもかかわらず、なぜ“被子”は“条”で数え、“床”は“张”で数えるという現象を説明できないと指摘した上で、量詞“条”が名詞“被子”と共起できるのは慣習的な心的イメージによる拡張であり、“被子”はたたまれた細長い形

で人間の体を覆い、また人間の体が細長い形をしているため、“被子”も細長いものだと認知されると主張している。

布団というと、日常生活の経験から、人間の体が入るような細長い形にして使うイメージがある。ベッドと違って布団は“条”の「柔軟性」を保っているから、そのイメージができたのではないかと本稿は思う。布団の材料は、本稿の中心的成員となっているズボン、タオル、マフラーと類似している。布団は“条”が持つ「柔軟性」を受け継いでいるからこそ、必要に応じて細長い形にたたくことができ、“条”との共起が可能になるのではないかと思われる。

### 3-4-5 【条<sub>5</sub>】

条件：①長さが目立つ（○） ②幅がある（○） ③柔軟性がある（△）  
④具体物（○）

特徴：具体物である。長さが目立ち、幅がある。川のようなしなやかな感じのものもあれば、鉄道のレールのような硬いものもある。

用例：河（川）、路（道）、瀑布（滝）、隧道（トンネル）、田埂（あぜ道）、胡同（路地）、走廊（廊下）、铁轨（鉄道のレール）。

このグループにはどこかに付着していて細長い形をしているものが集まっている。このグループのものはもう一つ細長いものに用いる量詞“道”で数えることもできる。ただ、中国語では「道路（道）」のように“道”という語素が入っている語の場合、量詞“道”の使用を避ける。“条”と“道”の違いについて、『中日辞典（第三版）』（講談社）では、「“道”は地面・壁面・天空・表皮などの面に、刻み込まれ嵌め込まれたように走る細長いもので、その面からそれだけを分離して取り出すことができないものと認識して数える場合の量詞」だと記載されている。

“条”も“道”も「川」に用いられる場合、“道”は背景の中に川があるという情景に注目し、“条”は流れている川そのものに注目すると思われる。

また、河（川）、路（道）、軌道（レール・軌道）などの名詞は具体的なものと抽象的な事物を両方表すことができる。抽象的な意味を表す語に量詞をつける場合、“条”の方が選択されると思われる。次のような例がある。

- (13) 在这种时候，我便觉得，我们的心，隔着一条河。  
(この時、私たちの間に川のようなものができたと気付いた。)  
(陈慧瑛《参星与商星》)

(13) の「川」は二人の間にできた「隔たり」を指す。

### 3-4-6 【条<sub>6</sub>】

条件：①長さが目立つ（○） ②幅がある（△） ③柔軟性がある（×）  
④具体物（○）

特徴：具体物ではあるが、一時的に現れるものである。長さが目立つが、柔軟性は感じない。幅の有無はものによる。

用例：光线（光線）、虹（虹）。

このグループは“条”が持つ細長いイメージが光などのような視覚に止まった細長いイメージに変換されたことが拡張の動機づけとなり，“条”を“光线(光線), 虹(虹)”などに用いたと考えられる。このグループも量詞“道”の使用が可能であるが,【条<sub>s</sub>】との違いはどこかに刻まれたものではなく,一時的に現れる具体物であるという点だと思われる。

### 3-4-7 【条<sub>7</sub>】

条件：①長さが目立つ(○) ②幅がある(×) ③柔軟性がある(／) ④具体物(△) 特徴：形はあるが,具体物ではない。幅がないが,長さが目立つ。柔軟性の有無は関わらない。 用例：半径(半径), 辺(辺), 弧(弧), 线段(線分), 正弦(サイン), 坐标(座標).
--

このグループの用例は主に『幾何』『物理』などの教科書に使われている語である。これらの例は宗(2012)に書かれた「実在物名詞」から「印記物名詞」という拡張プロセスに適合するものである。「印記物名詞」は視覚記号,印,痕などを含めるが,実際に存在するものではなく,標識性という特徴を持つ。中国語の量詞にとってカテゴリーが「実在物名詞」から「印記物名詞」に拡張するのはよくある現象である。例えば,“一条黑线(黒い糸)”から“一条斜线(斜線)”に拡張する。このグループは形はあるが,具体物ではないという特徴から具体物と抽象的なものの上に立つような存在だと思われる。

### 3-4-8 【条<sub>s</sub>】

条件：①長さが目立つ(△) ②幅がある(／) ③柔軟性がある(／) ④具体物(×) 特徴：具体物ではないため,幅も柔軟性も関わらない。抽象的に長いイメージを感じる。 用例：广告(コマーシャル), 建议(提案), 理由(理由), 消息(情報), 评语(コメント), 新闻(ニュース).
--

ジョージ・レイコフ(1993)では,「ラジオとテレビの番組も「本」で類別される。ラジオおよびテレビの番組は,手紙を書いたり電話で話したりするのと同じく,遠距離のコミュニケーションの形態である」と指摘されている。このグループに集まっている語は一方向的に何かを伝えるためのものが多い。しかし,何かのメッセージを伝えようとするという共通点があると思われる。また,このグループは内容的に抽象的なものではあるが,文字にすれば,文字列の長いイメージが残るとも考えられる。次のような例がある。

- (14) 同样内容的一条广告可以通过报纸、杂志、广播、电视等媒介传递出去。(同じ内容のコマーシャルは新聞,雑誌,ラジオ,テレビなどのメディアを通して送り伝えられる。) (高涤陈《社会主义商业物价学》)
- (15) 一天,以群突然从报上读到一条消息,几乎使他年轻的生命窒息过去。(ある日,以群さんが新聞で一つのニュースを目にして息が詰まったような思いをしてしまった。) (叶舟《叶以群的最后十年》)



(14) では、“条”の数える対象は“传递（伝える）”という意味の動詞と共に起する“广告（コマーシャル）”である。(15) では、“条”の数える対象は新聞に印刷されている“消息（ニュース）”である。どちらにしても具体的なものではないが、活字にすれば“条”の持つ「長い形」を思い浮かぶと思われる。

### 3-4-9 【条 9】

条件：①長さが目立つ（○） ②幅がある（△） ③柔軟性がある（／）  
④具体物（○動物）

特徴：具体的な無生物ではなく動物である。長い形をしている，又は胴体が長い。

用例：蛇（蛇），蚯蚓（ミミズ），蜈蚣（ムカデ），毛毛虫（毛虫），魚（魚）狗（犬），牛（牛），驴（ロバ）。

中国語では動物に用いる量詞は“匹 pǐ”“头 tóu”“只 zhǐ”がある。『現代漢語量詞用法詞典』によれば，“匹”は馬やロバなど，運搬する役割を果たす動物を数える。“头”は牛，ロバ，ラバ，羊など，人間にとって力仕事を手伝ったり利益になったりするような家畜を数える。“只”は鳥類，獸類，昆虫を数える」のように使い分けをされている。

【条 9】の用例の数え方について，“蛇，ミミズ，ムカデ，毛虫”は主に“条”で数えるが，“犬”“牛”“ロバ”は“条”のほかにも，それぞれ“只”“头”“匹・头”でも数える。魚の量詞は“尾 wěi”と“条”がある。“尾”と“条”の違いについて，『現代漢語量詞用法詞典』では，“尾”は魚のみに用いる量詞であり，魚の“尾（しっぽ）”の“尾”という字を借りて量を表し，“条”は魚の形状に注目して量を表す」と記載されている。

このグループは動物の体の特徴に注目して細長い形を表す量詞“条”と共に起していると思われる。具体的に「蛇，ミミズ，ムカデ，毛虫，魚」のような細長い形をしているものと，“犬，牛，ロバ”のような胴体が長いものに分けられると思われる。この用法について，現時点では“条”の中心的成員である【条 1】から拡張された用法だと断じることはできない。何故ならば，無生物から生物までの拡張が中国語においては存在するかどうかを検証する必要があると思われるからである。

本稿の目的は日本語と中国語の類別詞の体系を対照することである。日本語では類別詞は有生のもの，無生物に大きく二分され，有生のものは人間と動物に更に分類されるという。それに対して，動物に用いる量詞の用法を見る限り，中国語では有生のものと無生物の対立はしないと思われる。例えば，鳥類など数える“只 zhǐ”はスーツケースや小船なども数えられる。このように日本語と中国語において，有生のものと無生物の対立はするかどうかは両言語の対照をする際に一つのポイントとなるため，本稿では，動物に用いる量詞“条”の用法を【条 9】として独立させ，中国語の特徴の一つとして挙げる。

### 3-4-10 その他

用例：命（いのち），好汉（豪傑），心（こころ）。

用例の中で「命（いのち）、好汉（豪傑）、心（こころ）」などの名詞も量詞“条”と共起関係を持つ。

“命 mǐng”は「いのち」という意味である。宗（2012）では「“命”は人間のいのちである。即ち、出生から死亡までのすべての過程であり、時間的に長い形をするものである」と分析されている。

“好汉”は「立派な男」という意味で、人間には関連しているが、男性に限る用法から考えれば、一般的な用法でなないと思われる。

“心”に“条”が用いられる場合、「横たえる」という意味の“横 héng”以外の動詞とはあまり共起しない。“横下一条心”は「思いきる」と「心を鬼にする」という意味になるが、この用法は習慣的な用法ではないかと思われる。

“命（いのち）”“好汉（豪傑）”“心（こころ）”のような意味上も使用上も、特殊な点を持つ例については今後の考察対象としたい。

### 3-5 中国語の“条”の拡張プロセス

中心的成員【条 1】（ネクタイ、タオル etc.）の条件は「長さが目立つ」「幅がある」「柔軟性がある」「具体物」という四つである。【条 1】から「もの」（具体物）、「こと」（抽象的なもの）に拡張されていると考えられる。

“条”の拡張プロセスを図 2 に示す。

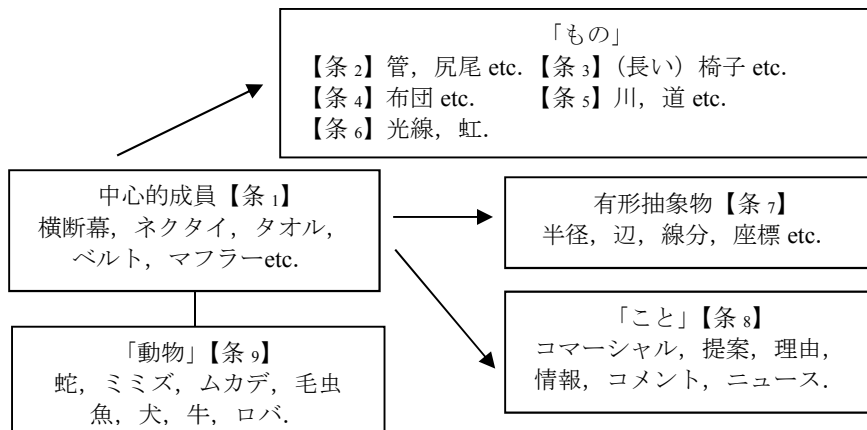


図 2：“条”の拡張プロセス

「もの」のグループは具体的なものがメンバーであり、中心的成員の特徴に類似する点が多いため、ここでは「近距離拡張」と称す。この中には【条 2】から【条 6】が入っている。【条 2】（管、リボン etc.）は、長さが目立つ、幅と柔軟性を持つがものによる。【条 3】（長い椅子、机）は、機能している部分が長く、幅もある。また、「長い」という形容詞を用いて椅子と机の長い形を表している。【条 4】（ハンカチ、布団 etc.）は、長さが目立たないが、柔軟性があるため、細長い形にたたんで使用する。【条 5】（川、道、トンネル etc.）は、どこかに付着しているもので、幅のあるものが多く、しなやかに長く伸びているイメージがある。【条 6】（光線、虹）は、一時的に出現するもので、長さが目立つ。

「もの」のグループに関して、中心的成員の「長さが目立つ」のほかに「柔軟性がある」という特徴も拡張プロセスの中で役割を果たしていると思われる。その特徴によって、形が細長くないが、細長い形にたたんで使用する布団なども“条”との共起関係ができたと思われる。

【条<sub>7</sub>】には「半径、辺、弧、サイン」などの記号がメンバーになっている。このグループは紙に印刷されているもので、形は確認できるが、実際に存在するものではなく、標識性という特徴を持つものである。“条”を用いる語のカテゴリーの中で、【条<sub>7</sub>】が中心的成員（具体物）と周辺の成員（抽象的なもの）の間に位置づける存在であり、宗（2012）が指摘しているように「実在物名詞」から「印記物名詞」まで拡張するプロセスに適合するグループである。中国語の量詞にとって「実在物名詞」から「印記物名詞」に拡張するのはよくある現象である。

【条<sub>8</sub>】はメッセージ性が強く、抽象的に長さを感じる「こと」（抽象的なもの）である。中心的成員から遠く離れたため、ここでは「遠距離拡張」と称す。このグループのメンバーは「コマーシャル、コメント、ニュース」などである。内容は抽象的なものではあるが、文字化することができるため、文字列の長いイメージが“条”の使用が可能になることにつながったと考えられる。また、相手、読者、観衆などに何かを伝えるというメッセージ性の強い内容に対して、相手などに届くように抽象的に長さを感じるのではないかと考えられる。

【条<sub>9</sub>】は、メンバーが「蛇、ミミズ、ムカデ、毛虫、魚、犬、牛、ロバ」などの動物であり、【条<sub>1</sub>】の「長さが目立つ」という共通点を持つ。しかし、このグループは【条<sub>1</sub>】からの拡張用法になるかどうかを今後確認するため、“条”の拡張プロセスを示す図2では、【条<sub>1</sub>】と【条<sub>9</sub>】の間に矢印を使わないことにし、【条<sub>9</sub>】の動物を独立のグループとし、中国語の特徴として挙げる。

#### 4. 日本語の「本」と中国語“条”の相違点

「本」と“条”の相違点について、中心的成員の特徴と拡張のプロセスとの二つの面から考えたい。

##### 4-1 中心的成員の特徴

「本」の中心的成員は「具体物で、細長い、限られた長さをもつ」という特徴をもち、髪の毛のような繊細なものから柱のような棒状のものまで含む。具体例は鉛筆、ペン、棒、タバコ、ひも、糸、髪の毛、木、柱、腕、脚、指などである。

“条”の中心的成員は「具体物で、長さが目立つ、幅がある、柔軟性がある」という特徴を持つが、中国語において細長いものに用いる量詞が複数存在し、“条”の特徴はほかの量詞と区別するため、細長さだけではなく、幅と柔軟性も条件となっている。具体例は横断幕、ズボン、ネクタイ、タオル、バスタオル、マフラー、ベルトなどである。

「本」は「限られた長さをもつ」という特徴があることで、大きさが関係しているが、“条”は「幅があり、柔軟性もある」という特徴を持つことで、柔らかいかどうかも関係している。例えば、橋と「本」が共起する場合、すべての

橋ではなく、橋を遠くから小さく見える場合に「本」の使用を容認する。一方、中国語の“条”は硬さをイメージする量詞“根”があるため、同じ「舌」という語に用いる時に、“条”が用いられる場合は柔らかくて細長い「舌」のイメージを強調すると思われる。

#### 4-2 拡張のプロセス

中心的成員から近距離の「具体的なもの」（具体物）、遠距離の「抽象的なもの」（「こと」）へ拡張されるという共通点を持つ。しかし、「本」は中心的成員から形が見えなくなる行為まで拡張されるが、“条”は中心的成員の「長さが目立つ」というイメージが何らかの形で残る。例えば、抽象的なものとしての「こと」グループの電話と手紙の例を見ると、「電話をかける」「手紙を書く」のような連絡する行為に注目することになる。中国語の“报道（報道）”“评语（コメント）”など、抽象的なものとしての「こと」グループの成員は内容が抽象的なものであるが、その抽象的な内容を文字化すれば文字列の長い形を思い浮かべることができる。

「本」の具体的なものと抽象的なものとの中間地点に位置づけられた野球のヒット、ホームラン、安打、サッカーなどのパス、シュートは具体物ではないが、細長い軌跡が残るイメージである。“条”の具体的なものと抽象的なものとの中間地点に位置づけられた記号などは抽象的なものであるが、紙などに印刷されているため「線」の細長い形が残る。

遠距離拡張された周辺の成員に関して、「本」のメンバーは連載小説、映画、テレビ番組、仕事、ライブステージ、電話、手紙など、文化的な活動を表しているものが多いが、「本」と共起する対象は意味的に制限があると思われる。例えば、仕事という語は「本」で数えられる時に仕事の内容は主に文化的な活動を指すようなイメージがあると思われる。“条”のメンバーはコマーシャル、提案、理由、コメント、情報、ニュースなど、メッセージ性の強いものであるが、文字にした場合の文字列の長い形が残る。

### 5. 日本語と中国語によるものの捉え方の違い

「本」と“条”は、数量類別詞として細長いものまたは細長く感じるものに用いられて、それぞれのカテゴリーを持っているが、カテゴリーの成員がどれぐらい一致しているかを見るために、本稿で挙げた「本」の用例を中国語の量詞で数える場合と、“条”の用例を日本語の類別詞で数える場合がどうなるかを考察した。その結果、「本」の用例の 37 語を中国語の量詞で数える場合、19 のグループに分かれ、少なくとも 20 種類の量詞が必要になった。また“条”の用例の 53 語を日本語の類別詞で数える場合、11 のグループに分かれ、9 種類の類別詞を用いることになった（なお、数え方を考察する際に、飯田（2004）の『数え方の辞典』と郭（2002）の『現代漢語量詞用法詞典』を参考した）。

中国語の量詞で「本」の用例を数える場合に用いられる量詞について、詳細を表 3 に示す。日本語の類別詞で“条”の用例を数える場合に用いられる類別詞について、詳細を表 4 に示す。

表 3 で示しているように、「本」の用例を中国語の量詞で数える場合、細長いものに用いる量詞の“条、根、支、枝、管”が用いられるほかに、“棵 kē、盘

pán, 盒 hé, 瓶 píng, 听 tīng, 把 bǎ, 座 zuò, 部 bù, 篇 piān, 份 fèn, 项 xiàng, 场 chǎng, 次 cì, 封 fēng, 个 gè”などの量詞も用いられることになった。

表 3：中国語の量詞で「本」の用例を数える場合

	本稿における「本」を用いる用例	対応の量詞
【本 1】	鉛筆, ペン, タバコ	支 / 枝
	棒, 髪の毛, 柱, 指	根
	ひも, 糸, 腕, 脚	条
	木	棵
【本 2】	カセットテープ, ビデオテープ	盘 / 盒
【本 3】	ビンに入ったもの	瓶
	缶に入ったもの	听
	チューブ入りのもの, スティックタイプのもの	管
【本 4】	ズボン	条
	ギター	把
	灯台, 橋	座
【本 5】	ヒット, ホームラン, 安打, パス, ジュート	个
【本 6】	連載小説, 台本, 映画	部
	論文	篇
	テレビ番組	个
【本 7】	仕事	份 / 项 / 个
	ライブステージ	场
【本 8】	電話	次 / 个
	手紙, 電報	封

また, “条”の用例を日本語の類別詞で数える場合, 細長いものに用いる類別詞の「本」のほかに, 「枚, 脚, つ, 点, 匹, 頭」などの類別詞も用いられることになった。

表 4：日本語の類別詞で“条”の用例を数える場合

	本稿における“条”を用いる用例	対応の類別詞
【条 1】	横断幕, ズボン, ネクタイ, マフラー, ベルト	本
	タオル, バスタオル	枚
【条 2】	尻尾, 舌, むち, 管, 鎖, リボン, 縄 ネックレス	本
【条 3】	腰かけ, 寝椅子, 机	脚
【条 4】	ハンカチ, 風呂敷, 布団, シーツ, 毛布	枚
【条 5】	川, 道, 滝, トンネル, あぜ道, 路地, 廊下 鉄道のレール	本
【条 6】	光線, 虹	本
【条 7】	半径, 辺, 弧, 線分, サイン, 座標	対応なし
【条 8】	コマーシャル, コメント, ニュース, 情報	本 / つ
	提案, 理由	つ / 点
【条 9】	蛇, ミミズ, ムカデ, 毛虫, 魚, 犬, 牛, ロバ	匹 / 頭

このような結果になった原因について次のように考えられる。

- 1) 中国語では量詞と数える対象の結びつきが強い。例えば、論文は“篇”で、手紙は“封”で、細長い植物は“棵”で決まって数えられる。
- 2) 日中両言語がものを数える時に注目するポイントが違う。例えば、ホームランやシュートなど、日本語はボールが描く軌跡に注目し「本」を用い、中国はボールに注目し、“个”を用いる。机の場合、中国語は機能している面に注目し、日本語は支えている部分に注目する。
- 3) 日本語はものの形を重視し、中国語はものの性能を重視する。日本語が見えた形、感じたイメージを主に形状を表す類別詞で数えるのに対し、中国語は数える対象の性質や機能を重視し、形状以外の量詞を選択する。例えば、灯台や橋、日本語は小さく細く見えるため「本」の使用を認めるが、中国語は移動不可能の建築物などに用いる量詞“座”を選択する。
- 4) 動物に関して日本語では基本的に動物と無生物を兼ねて数える類別詞はないが、中国語では動物と無生物を区別せずに同じ量詞で数えることがある。
- 5) 「本」の拡張範囲が“条”より広い。「本」は「電話をかける」「手紙を書く」という行為まで示すことができるが、“条”は事物に止まっている。

## 6. おわりに

日本語も中国語も数量類別詞を持つ言語である。ものの形状を中心に類別する形状類別詞から、拡張用法を持つ日本語の「本」と中国語の“条”を対象に、中心的成員、拡張のプロセス、カテゴリーの成員構成などについて、両言語の対照を試みた。「本」の中心的成員になるのは具体物で「細長い」「限られた長さをもつ」という特徴があり、“条”の中心的成員は具体物で「長さが目立つ」「幅がある」「柔軟性がある」という特徴がある。同じく具体的なものから抽象的なものへ拡張される用法を持つが、中心的成員から近距離、遠距離へ拡張されていくプロセスの中で、拡張された先には異なる様相が多くある。「本」を用いるカテゴリーの成員と、“条”を用いるカテゴリーの成員の特徴に大きな差異が見られる。

「本」と“条”の用法を考察することを通して、日本語と中国語の間に、認知範疇における原則の共通性と細部の相違点が共存していることがわかった。また、具体例を示しながら日中両言語の相違点を明らかにした。日本語と中国語は近いようで、遠くも感じる二つの言語だと言えるであろう。

### 参考文献

- 相原茂（編）（2010）『中日辞典（第三版）』講談社。  
飯田朝子（2004）『数え方の辞典』小学館。  
依藤醇 他（編）（2003）『中日辞典（第2版）』小学館。  
何傑（2003）『量詞一点通』北京語言大学出版社。  
何傑（2008）『現代漢語量詞研究（増编版）』北京語言大学出版社。  
郭先珍（2002）『現代漢語量詞用法詞典』語文出版社。

- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社。  
北原保雄（編）（2010）『明鏡国語辞典（第二版）』大修館書店。  
小出慶一（2003）「助教詞「本」の用法の拡張について—なぜ「仕事」は「本」で数えられるか—」『群馬県立女子大学紀要』第24号。  
ジョージ・レイコフ（1993）『認知意味論』（池上嘉彦・河上誓作 他訳）紀伊國屋書店。  
石毓智（2001）「表物体形状の量詞的認知基礎」『語言教学与研究』第1期。  
宗守雲（2012）『漢語量詞的認知研究』世界図書出版公司。  
張敏（2007）「名量詞“道”与“条”的辨析」『術語標準化与信息技術』中国標準化研究所 第3期。  
唐苗（2007）「量詞“条”与“根”的比较研究」『武漢理工大学学報』第20卷，第4期。  
深田嘉昭（2000）「日本語分類辞「本」に関する一考察—なぜはずれた宝くじは「本」で数えられないのか—」『早稲田大学文学研究科紀要』40。  
松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」『言語研究』99。  
水口志乃扶（2004）「類別詞とは何か」『類別詞の対照』くろしお出版。  
孟繁傑（2009）「量詞“条”的产生及其历史演变」『寧夏大学学报』第31卷，第1期。  
李行健（2004）『現代漢語規範詞典』外語教育与研究出版社。

#### 付記

本稿は平成26年度（2014年度）に埼玉大学大学院文化科学研究科に提出した修士論文に加筆修正を施したものです。

## **An Analysis of the Classifiers “HON”（本） and “TIAO”（条） which Count Elongated Objects in Japanese and Chinese: Exploring Different Ways of Usage in both Languages**

Hong DAI

The classifier that counts elongated objects in Japanese is “HON（本）”, and “TIAO（条）” in Chinese. In this article, we examine how the membership of the target category of these classifiers is extended from those of the core to the peripheral. As a result, it is considered that the characteristics of the core members are different in some respects. For example, one of the features of “HON” is that it is adopted for slender objects and also for things which have a limited length. However, unlike

Japanese, the characteristic of "TIAO" is that it is applied to things which are prominent in length but also flexible in width. Furthermore, while the processes of these two classifiers are similar, "HON" is extended to include invisible things, whereas "TIAO" never leaves the physical aspect of elongated images behind. Although these two classifiers share common features which identify elongated objects, their category memberships are different in some crucial points and consequently, have different usages.